

## 『根本中頌』に現れる実体の概念 及びそれについての批判

李 泰 昇

1. ナーガールジュナの代表作として知られる『根本中頌 (Mūlamadhyamakakārikā)』は、よく知られているように、その内容の核心は「縁起—無自性—空」に対する論証である<sup>1)</sup>。すなわち、ナーガールジュナは、仏教の思想である縁起をもとにして当時、印度思想の根本概念であるアートマンを含めアビダルマ仏教の重要概念の自性 (svabhāva) を批判的に考察し、さらに大乘仏教の空思想を体系的に論証したのである。ここにおいてナーガールジュナが批判的に検討した印度のアートマン及び自性に関する概念は、一般的に実体 (dravya, Entity), 本体 (substance) と呼ばれ、仏教の無我説に対立する我の思想を反映する概念である。印度においては、ゴータマ・ブツダによって仏教の根本思想として無我説が確立されて以来、無我と我との思想的な論争は印度思想界を貫いていると言っても過言ではない。これは仏教哲学と印度正統哲学との間の長い思想的論争の核心が実体、本体に関する論争であったことを物語っている。このような実体、本体の概念については、大乘仏教の理念的な体系を確立したナーガールジュナも、徹底的な批判をなしている。ナーガールジュナの思想の中、このような実体、本体についての批判が、もっとも彼の思想の根本であることを、梶山博士は次のように述べられている。即ち、「彼 (=ナーガールジュナ) がいったことは、本体を固執する立場では因果関係も論理的関係もなりたたない、ということである。本体をもったものの間にある依存関係を否定して、関係一般というものは同一とか別異とかの本体をもたないものの中にしかなりたたない、といっているのである<sup>2)</sup>。」このようにナーガールジュナも、実体、本体をもとにする思想に厳しく論理的批判を加えている。そしてこのような論理的批判の姿をよく示しているものが、ナーガールジュナの『根本中頌』であることは言うまでもない。

本稿は、このような実体の概念を『根本中頌』の全体において調査し、またそれについての批判の仕方を考察するものである。『根本中頌』において実体の概念がもっとも重要な概念であることは言うまでもないが、筆者が知る限りその実

## (106) 『根本中頌』に現れる実体の概念及びそれについての批判（李）

体の概念が揃って出ているものはあまりない。従って、本稿においてその実体の概念を『根本中頌』全章から拾い出しその実体の概念が『根本中頌』においてもっとも重要な役割を果たしていることをより明確にしたい。

2. 『根本中頌』は、全27章、450余偈頌で構成され、ナーガールジュナの思想をよく表しているものである。その内容は、「縁起—無自性—空」の概念を論証するものとして、特に実体の概念としての自性についての批判が目だっている。自性の概念とは、当時部派仏教の中の説一切有部の思想と深く関連したものであって、その自性に対する批判によってナーガールジュナが説一切有部の思想を批判したことがよく分かる。この自性を代表とする実体の概念は、言い換えれば、存在者の特有の本来性 (Eigenschaft), 存在者を他と区別して存在させ認識せしめる個別的性質 (Eigenmerkmal), 現象としての存在者の背後にあってそれ自身は変化しない本体・基体 (Substrat) を指し、それを一言にしてそれ自体で存在・成立している「自存的存在」を言うのである<sup>3)</sup>。そのような自存的存在として実体は、仏教の基本概念である無常・無我などとは正反対の概念であって、いわゆる印度思想の根本をなしている概念である。このような実体の概念をナーガールジュナも『根本中頌』全体において批判している。

ナーガールジュナが批判する自性のことについてよく知られていることは、自性とは因縁を離れているものであって、それを言い換えれば、作られるものではなく、他のものに依存しないものである (15-1.2.)。先に見たような「自存的存在」である。このような性質の実体の観念は、伝統的な概念であるアートマンとその内容が通じている。アートマンも変化しないもの、単一のもの、主宰性のものであるからである。『根本中頌』には、この自性とアートマン以外にも沢山の実体の概念が出ている。そのなかで目立つものは、何かの作用あるいは現象の中に、その作用を動かす主体の概念である。即ちある行為がある場合、その行為の主体である行為者のことである。ナーガールジュナはその主体の概念として、行く主体 (2章), 見る主体 (3章), 貪欲の主体 (6章), 行為主体 (8章, 10章), 感覚作用の主体 (9章) などを挙げている。この主体の概念もそれ自体は変化することなく、それと関係する作用あるいは現象などを主宰するものであって、実体の概念を反映している。そしてナーガールジュナは、ある現象などの先に存在する原因たるもの、またある現象の根本的な特性なども実体の概念として挙げている。ナーガールジュナは、そのような実体の観念を『根本中頌』の全体において明確に提示した後、それを実体と現象、主体と作用などの関係をもとにして論理的に追求

して行く。それでは以下に『根本中頌』に出てくる実体の概念とその実体に対する批判の論理を表にして見ることにする。

<表><sup>4)</sup>

	第1章 観因縁品	第2章 観去来品	第3章 観六情品	第4章 観五陰品	第5章 観六種品	第6章 観染染者品	第7章 観三相品
実体概念	縁の自性	行く主体	見る主体 他	物質の原因	虚空の特相	貪欲の主体 (貪欲者)	生起を起こす生起, 本生
実体概念 批判論理	自性を持つ縁とその結果との関係を論理的に考察	行く主体と行く作用との関係を考察	見る主体と見る作用との関係を考察	物質の原因と物質との関係を考察	虚空の特相と虚空との関係を考察	貪欲の主体である貪欲者と貪欲との関係を考察	生起の根本である本生とその生起作用との関係を考察
章の 核心内容	四縁に自性を認める場合, その結果を証明できない	行く主体を設定すると行く作用は成立しない	見る主体を設定すると見る作用は成立しない	五蘊の一つである色に原因を想定する場合, 色は成立しない	六大の一つである虚空に特相があると想定すると虚空, 特相とも成立しない	貪欲という現象にその主体として貪欲者を想定すると貪欲またその結合などは成立しない	有為の特性である生住滅の中, 生の作用を考察する場合, その根本的な生すなわち本生を想定すると生は成立しない
備考	四縁: 因縁, 所縁縁, 等無間縁, 増上縁 自性: svabhāva	行く主体: gaṇṭṛ	六情: 六つの感覚器官 (眼耳鼻舌身意) 見る主体: draṣṭṛ	物質: 色, 五陰: 色受想行識, 物質の原因: 地水火風の四大	六大: 地水火風空識, 特相: lakṣaṇa	貪欲者 (= 染者): rakta	三相: 生住滅, 生起を起こす生起 (生生): utpāda-utpāda, 本生: mūla-utpāda

	第8章 観作作者品	第9章 観本住品	第10章 観燃可燃品	第11章 観本際品	第12章 観苦品	第13章 観行品	第14章 観合品
実体概念	行為者	感覚作用の主体, アートマン	行為主体	前際: 実体的過去	自体のブドガラ	自性	見るもの, 貪欲者等
実体概念 批判論理	行為者と行為作用との関係についての考察	感覚作用を持ってまたそれに先行して存在するアートマンと感覚作用との関係を考察	行為主体と行為作用との関係を考察	過去, 未来を実体的に想定したことの問題点	苦を生み出すブドガラと苦との関係を考察	変異しない自性と変異するものとの関係を考察	主体, 自体を認めた場合, それらの結合関係を考察

## (108) 『根本中頌』に現れる実体の概念及びそれについての批判 (李)

章の 核心内容	行為主体として行為者を想定する場合、その行為作用は成立しない	見る作用、聞く作用等に先行して存在するアートマンを認めるならその作用等は成立しない	行為主体と行為作用との関係を火と薪の關係に喩えて、両方成立しないことを論証	実体として過去、未来を想定すると老死なき出生、出生なき老死などがある誤謬が生ずる	苦を作った主体であるブドガラを想定するといかなる場合にも苦は成立しない	変異しない自性を認めると一切の変異は成立しない	見る主体として変異しない見るものを認めるとそのものに見る作用、見る対象との結合は成立しない
備考	行為者： kāraṅka, 行為主体： karṅ	アートマン： ātman	行為主体： karṅ, 行為： karman, 火：agni, 薪：indhana	前際： pūrvakoṅi	自体のブドガラ： svapudgala	自性： svabhāva	見るもの (draṅṅ) 見る作用、 見られる対象 / 貪欲、 貪欲者 (rakṅa), 貪欲の対象

	第 15 章 観有無品	第 16 章 観縛解品	第 17 章 観業品	第 18 章 観法品	第 19 章 観時品	第 20 章 観因果品	第 21 章 観成壊品
実体概念	自性	ブドガラ： 輪廻の主体	自性	アートマン	実体的時間	自体、自性	自性
実体概念 批判論理	存在が自性若しくは他性を持つ場合の考察	輪廻の主体と取著との關係を考察	業が自性として存在する場合の考察	アートマンと五蘊との關係を考察	実体概念として過去、現在、未来の三世の時間についての考察	因果を自体、自性として認めた場合の考察	生成と消滅との自性を認めた場合の存在を考察
章の 核心内容	自性とは因縁を離れるもの、作られないものである	変異しないブドガラを輪廻の主体として認めるなら取著などは成立せず、輪廻は成立しない	自性として業を認めるなら、それは常住のものになり、また業を作る作者はない	アートマンと蘊との關係を考察すれば、アートマンは生滅するものになり、諸法の本性は一切戲論を離れている	三世は互いに依存していて、その自性を想定することはできない	因果の概念を自体、自性として認めるなら、因果は成立しない	生成と生滅との自性を認めるなら、その關係することは成立しないし、それに基づく存在も成立しない
備考	自性： svabhāva	ブドガラ： pudgala, 取著： upādāna	自性： svabhāva	アートマン： ātman, 蘊： skandha	時間：kāla	自体： ātman, 自性： svabhāva	自性： svabhāva

	第22章 観如来品	第23章 観転倒品	第24章 観四諦品	第25章 観涅槃品	第26章 観十二因縁品	第27章 観邪見品
実体概念	自性	自性	自性	自性	(なし)	アートマン、 先行する蘊
実体概念 批判論理	自性の概念と しての如来と 五蘊との関係 を考察	顛倒に自性を 認めた場合の 考察	自性と空性と の対立的関係 を考察	自性と空性と の関係を考察	(十二縁起)	(実体的な概 念に基づく見 解の批判)
章の 核心内容	如来が五蘊に 依存すること は自性として ではなく、空 であることに よる	顛倒及び煩惱 などは自性と してあるもの ではない	四聖諦等を含 めた一切のも のは空性の上 に成立する、 中道(縁起= 空性=仮設)	一切法は空で あり涅槃は空 性の体得から 得られる	(伝統的な 十二縁起につ いての説明)	(一切の存在 は空性であ る)
備考	如来： tathāgata 自性： svabhāva	顛倒： viparyāsa 自性： svabhāva	空性： śūnyatā 自性： svabhāva	涅槃： nirvāṇa 自性： svabhāva		アートマン： ātman, 蘊：skandha

3. ナーガールジュナの『根本中頌』をよく見ると、すべての章において実体の概念が出てくるし、さらにその実体の概念をもとにそれについての論理的な批判をしている。その批判の論理において目立つことは帰謬法 (prasaṅga) の論理と四句分別 (catuskoṭi) の論理である。帰謬法はナーガールジュナがもっとも好んで使っている論理であって、実体の概念を否定するに際して、まず実体の概念を仮に認めて、そこに沢山の過失が生ずることによって実体を否定する論理である。例えば、『根本中頌』第2章の行く主体に関しては、もともと行く作用には行く主体などはありえないのに、行く主体を認める実体論者を論破するために、まず行く主体があると仮定して論理を展開する。そうすると沢山の誤謬が生ずる。例えば「もし行く主体が行くとすると、二つの行く作用があるとの誤謬が生ずる。行く主体という場合の行くことと、行く主体が行くという場合の行くことである」(2-11)。このように行く主体を仮定すると、沢山の過失が生じて、結局行く主体などはないと言うのである。このような帰謬法の論理は、『根本中頌』のすべての章において沢山出て来る。おそらくこの帰謬法の論理は、ナーガールジュナの時代には、正しい論理法には認められていなかったようであるが、やがて後代になると仏教の正当的な論理として認められるようになる。

また四句分別の論理も実体の概念と深く関係している。四句分別とは事物の存在方式を四つに分けたことである。例えば、『根本中頌』第1章の第1偈において「すべてのものは自身から、また他者から、また両者から、また無因から生ず

## (110) 『根本中頌』に現れる実体の概念及びそれについての批判 (李)

ることではない」と言っているように、存在の方式を四つに纏めたものである。この1-1の四句分別の「自身から生ずることではない」というのは、変化せず単独で存在する実体の概念を否定するものである。すなわち自ら存在する実体そのものが、それ自身によって生ずることではないからである。自身から生じないだけでなく、他のものから生ずることもない。なぜなら、他のものから生ずるとしたら、ある事物はそのものと全然関係ないものから生ずることになるからである。従って自、他から生ずることがないものは、自他の両者から、また無因のものから生ずることではない。『根本中頌』の12章にも苦に関して四句の論理が出ているが、そこにおいても、自身からの生起と関連して、苦と自体のプドガラとの関係が論理的に追求され、苦が自身から生ずることを否定する。この四句分別の論理は、『根本中頌』全体を貫く思考法で重要であるが、その論理も実体の概念を批判することと深く関係していると思う。

ナーガールジュナは、『根本中頌』全体において実体の観念を論破している。そのことからナーガールジュナは仏教の根本思想に徹底的に立脚していると言えよう。さらに大乘仏教の思想を体系化したナーガールジュナの立場を考えれば、彼は新しい大乘仏教の立場から、仏教の精神をきちんと見直そうとしたのではなかろうか。仏教の思想と違う印度思想および仏教精神から外れた部派仏教の教理などをすべて批判的に整理して、仏教の真面目をあらたに立てようとしたのが、『根本中頌』に見えるナーガールジュナの姿であると思う。

- 
- 1) 筆者は、伝統の用語として『中論』を使わず、チャンドラキールティの『明句論』の梵語原本に見える Mūlamadhyamakakārikā に従い、偈頌だけを言う時には、『根本中頌』を使う。
  - 2) 梶山雄一『中観と空I (梶山雄一著作集 第4巻)』春秋社、2008, 7. p.57.
  - 3) 江島恵教『空と中観』春秋社、2003, 7. p.9.
  - 4) この表は、三枝充憲『中論偈頌総覧』(第三文明社、1985,12)をもとに作って見たものである。またこの表を作ったきっかけは筆者が『根本中頌』を訳し、出版したことによる。(『根本中頌』(韓国語訳、少し無畏疏を添加)、ジマンジ、2008, 3)

〈キーワード〉 実体、『根本中頌』、ナーガールジュナ、帰謬法、四句分別  
(威徳大学校仏教文化学科副教授)